

書物と寺社参詣

旅の往来物の分析から

原 淳一郎

Books and Pilgrimage to Temples and Shrines : Based on Analysis of Orainono Textbooks on Travel
HARA Junichiro

はじめに

- ① 関東における参詣型往来の時代区分
- ② 花屋の出版計画と寺社参詣の大衆化
- ③ 関東各参詣地の名所案内記類
- ④ 往来物の伝播と地方出版の活性化
おわりに

【論文要旨】

往来物研究は、岡村金太郎編『往来物分類目録』、石川謙・石川松太郎編『日本教科書大系・往来編』、石川松太郎『往来物の成立と展開』といった先駆的な業績によって先鞭がつけられたが、その成立過程および系譜の考察が主であった。二千年代に入ってから相次いだ研究書の刊行によって、ようやくその社会的役割の検討にも目が向けられるに至った。しかし依然として教育史の観点すなわち「庶民教育のテキストである」という固定観念から逸脱することはなかった。そのため本稿で検討をおこなう「参詣型」往来についても、「道中膝栗毛」が流行するような旅行ブームに乗った一時的なものという評価しか与えられてこなかった。この意味で、往来物の社会的役割への考察は未だ多くの可能性を秘めたものであると考える。

そこで本論では、おもに江戸で出版された往来物に焦点を当て、次の通り時代区分を行った。第一期（明和～寛政期）、第二期（寛政六年～文化十年）、第三期（文政四年～）、第四期（文政五年～）、第五期（天保三年～）がそれである。第一期は上方で出版されていた定番往来物の出版、第二期・第四期はオリジナルな出版が行われた時

期、第三期・第五期はそれぞれ前の時期の焼き直しをしていた時期と言える。ただし第二期は比較的自由な発想のもと刊行が行っていたが、すでに巷に名所案内や地誌が溢れつつあった第四期は他作品との差別化を図る必要性に迫られた。また十返一九のように他作品から転用するなど安易な刊行も目立ち、内容よりもむしろ作者の知名度による販売戦略が特徴であった。

参詣型往来が登場した寛政期は、三都などわずかな場所をのぞいて「旅の大衆化」に対応しえる作品はほとんど皆無であった。そのため旅に際しての実用書として利用され、「参詣型」往来そのものも、本文のほかに縁起、街道図といった実践的な情報を加えて実用性を高めていった。それだけではない。多くの地域にとって「参詣型」往来ははじめて経験するその地域の「地誌」的存在でもあった。そのため地域の地理教育にも一役買い、その後の地域住人の手による地誌編纂という大きな歴史の潮流をも生み出す一助となった。

【キーワード】 往来物、参詣型往来、名所案内、寛政期

はじめに

(一) 寺社参詣の大衆化と出版文化

寺社参詣史から近世史を問い直すことを考える場合、いかにしてその参詣現象が起きてきたのかと問うことが重要である。何故ならどうして寺社参詣が大衆化したのか、という問を發することは、必然的に近世社会のなかにその要因を求めることになるからである。

近世の寺社参詣が大衆化していく表象として、新城常三氏は、中世における旅宿の發達、貨幣の流通、海上交通の發達、御師・宿場などの社寺側の受入体制の整備を受けて、近世において農民の自立、商人の上昇、講・頼母子等の共同体の普及、さらなる交通環境の好転などをあげた。⁽¹⁾ そしてそのおおよその時期を享保期と捉えている。

十七世紀の江戸文化について、高尾一彦氏は、稼いで遊ぶという人生観、勤労という倫理意識、美意識、政治批判意識の高まり、それを支える経済的条件の發達を挙げている。⁽²⁾ この高尾説を受ける形で、水江漣子氏は明暦の大火後頃から遊びと好色の雰囲気がち満ちており、浮き世への憧れなど庶民の自立的な生活意識が見られることになったことを指摘し、『紫の一本』のような名所案内記が登場してくる時代性を考察している。⁽³⁾ 一方、宗教史では、圭室文雄氏が、幕府の檀家制度によって抑制された信仰心のはげ口としての祈禱寺院への志向を指摘している。⁽⁴⁾

このように、寺社参詣が發達しないしは大衆化を成し遂げていく要因を分析する研究は従来よりある。しかし、全体として旅の実態解明に重きが置かれてきたため、社会的動向と絡めた考察が十分に深められることがなかった。例えば、寺社参詣が大衆化を果たしていく過程で、出版文化の果たした役割は欠くことのできないものである。にもかかわらず、

名所図会ブーム、膝栗毛ブームによって旅が一般的となったというような概説が簡単になされることが多い。しかしこれを論証したものは未だに見あたらず、實際旅をする場合、どのような書物や地本、絵図をもとにしていたのか、ということとは勿論、そもそもそれらの出版物がどのような階層に購入されていたかといった一つ前の段階の研究もようやく厚みを増してきたところである。⁽⁵⁾

本稿は、このような研究状況を鑑み、十九世紀末に急速に増えた旅に関する往来物の基礎的考察を行う。その上で往来物が寺社参詣の大衆化に果たした役割、そして他出版物との因果関係を考察することとする。

(二) 旅の往来物の先行研究

往来物の研究をはじめて体系化に近づけたのが、岡村金太郎編『往来物分類目録』(啓明会、一九二二年)である。このなかで地理類が往来物のなかでもっとも種類が多いとされる。続いて石川謙・石川松太郎編『日本教科書大系・往来編』(講談社、一九六八―一九七七年)が刊行された。この大系ならびに、はじめての往来物に関する体系的な研究書ともいえる石川松太郎氏の『往来物の成立と展開』(雄松堂、一九八八年)において、往来物の概要と分類の指針が提示された。これによると、古往来においては、南北朝期から室町期にかけて『十三湊往来』などの地理類が編纂され、近世に入ると、その種類は膨大なものとなり、その編集方針から五類型(国尽型・地誌型・都路型・参詣型・特殊型)にわけることが可能とされる。地誌型では、もともと古いのは慶長十七年(一六二二)に筆写された『駿府往来』であり、三都を対象とする往来物を手始めに盛んとなるのが、十七世紀半ばである。それから半世紀を経て登場するのが「参詣型」往来物であり、その起源を元禄期とするもの⁽⁶⁾、正徳五年(一七一五)とするものがある。⁽⁷⁾ その正徳五年のものとは「竜田詣」である。この『竜田詣』は東日本の『隅田川往来』と並んで、西日本では

もつとも流布された参詣型往来である。対象地である竜田大社は、大和国と河内国の国境に位置し、まさしく大坂の郊外にある。この『竜田詣』の内容は、奈良にとどまらず吉野や、紀伊国、和泉国などもその範囲に含んでいることが特徴である。

江戸の参詣型往来の端緒は明和八年（一七七二）の『隅田川往来』である。⁽⁸⁾それより徐々に多様化し、扱われる範囲も広汎化していった。これについて、石川氏は、「近世後期の江戸庶民における財力の厚みが増して、かれらの営む文化圏・生活圏の幅と興行きとが著しく拡大した事実を示唆するものとも解されよう」と評価している。⁽⁹⁾

二千年を過ぎると、八鍬友広『近世民衆の教育と政治参加』（校倉書房、二〇〇一年）、梅村佳代『近世民衆の手習いと往来物』（粹出版社、二〇〇二年）、丹和浩『近世庶民教育と出版文化―「往来物」制作の背景―』（岩田書院、二〇〇五年）などが相次いで刊行された。前者二書は、いずれも民衆教育史の観点で、もっと平たく言えば民衆が読み書き計算力を獲得し、生産力だけでなく文化的にもひとつの社会階層としてあらたな知的・文化的ネットワークを形成していき、あるいは政治参加していき、自己主張する民衆に脱皮していく姿を描く手段として往来物を扱っている。

後者一書は、従来の研究について、成立過程・系譜を追うものが多く、その社会的役割という点がおざなりとなっていたことを批判した上で、次のような結論を導き出している。

従来の往来物で長距離移動を前提とするものは、京都・江戸間のもの、伊勢参宮関連のものがその代表作であった。これ以外の土地や街道を含む往来物は、新鮮でもあり、また、参詣を建前とした旅行が盛んだった当時にあつて、人々に迎え入れられたことは考えられる。しかし、生活上必要な最低限の学習を行うことが本義の庶民教育で、これら新機軸の往来物がどこまで必要とされたかという

点については、疑問の余地がある。これらの往来物が後継作を生まなかったのは、学習の実態よりも、『道中膝栗毛』の流行及び長距離旅行のしやすくなつた時期に乗じた、一時的なものであつたためではなからうか（傍線筆者）⁽¹⁰⁾

右の記述からも明らかな通り、丹氏もまた、教育史の視点は脱却しきれていない。またやはり出版文化と旅文化の因果関係が例証なく明かされている感がぬぐえない。ただ書物の系譜、作者の経歴だけ追うのは、その社会性を鑑みなければ歴史学としては無意味であると思われるので、参詣型往来の歴史と筆者の専門分野である寺社参詣史の成果と付き合わせ、その社会的機能をみていく必要があるであらう。⁽¹¹⁾

近年は、神田由築氏が、服部幸雄氏の文化の時代区分論を参考にして、文化の大衆化が動態化する分水嶺の時代を寛政・享和期とする提起をしている。⁽¹²⁾また以前より中村幸彦氏が、社会への逼塞感、あるいは学問の分化などの諸要因により、知識階層に文人趣味が広まり、学問の趣味化、余技化が甚だしくなり、⁽¹⁴⁾彼らの趣味生活の余技として発生してきたのが戯作であるとし、それが寛政期になると、戯作者・読者層双方ともより一層の広がりや質の低下を招き、次第に民衆の期待に添うものへと変化したとしている。

さらには、一九七〇年代から八〇年代にかけて盛んとなった宝暦・天明期への着目も文化史の立場から再燃している。羽賀祥二氏の『史蹟論―十九世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、一九九八年）では、十九世紀に生まれた地誌編纂、顕彰碑設立に代表される「由緒の時代」・「復古的潮流」は一朝一夕でできたものではなく、宝暦頃から二三世代かけて地域や家に蓄積された知識を基盤とするとしている。また筆者も、寺社参詣の大衆化という観点から、とくに参詣地の複合化という現象が盛んとなる点から、宝暦・天明期をその画期と見ている。⁽¹⁶⁾したがって、天保期・嘉永期などを扱う研究もそうだが、文化・文政

期の文化現象を「静」と捉えたと、その淵源となる「動」の時代を探るのが主体となつていると言える。おおよそ享保期あたりを参詣の遊樂化ないしは近世の社寺参詣の發達の目安としている新城常三氏の説⁽¹⁸⁾、村の由緒の契機を同じく享保期とする久留島浩氏⁽¹⁹⁾、地方文人・在村文人が登場する時期としてやはり享保期を想定してゐる塚本学・杉仁⁽²⁰⁾、両氏の文化論、そして羽賀祥二氏の史蹟論、これらをいかに咀嚼し、化政文化までの道筋を描いていくかが、目下の課題ではないだろうか。

① 関東における参詣型往来の時代区分

まずは参詣型往来の時代区分を行わなくてはならない。ところが、『日本教科書往来』などに記される年代は、往来物に記された記述をそのまま採用しているものが多い。しかし、今回の調査の過程で、初刊の年代はそのままに、初刊の書肆名を削り、再板した書肆名を刻印していると疑われるものが予想以上に多いことが判明した。表一は、この点を踏まえて作成した年代代表である。採録したのは、江戸の書肆から刊行された参詣型往来である。前述の通り、原史料を調査してもなお年代が原史料の通りであるか否か判断しがたいという性格上、新編、増補改訂による再板などでもできるだけ収録し、刊行が考察の結果などから推定できるものは() 付きで記した。その結果、おおよそ五期に区分できると考えられる。

第一期 明和〜寛政期

江戸で初めて出たとされる「隅田川往来」をはじめ、京の「近江八景文章」、大坂「竜田詣」という手習い本としての定番に若干改訂を加えつつ出版した時期である。なお第二期に活躍する星運堂は、天明八年(一七八八)に「新編松島往来」を刊行している。

第二期 寛政六年〜文化十年

表一 江戸書肆による参詣型往来物の時代区分

書名	刊行年	版元・作者
第一期		
隅田川往来	明和八年	西村屋与八
新編松島往来	天明八年	花屋久次郎 (星運堂) 膝耕徳
第二期		
真間中山詣	寛政二年春	花屋久次郎 膝耕徳
飛鳥山往来	寛政三年	須原屋文助・三崎屋清吉合梓 佐熊耕梁編
上州妙義詣	寛政六年	花屋久次郎 高井蘭山・高橋尚富
矢口詣	寛政六年	花屋久次郎 高井蘭山
日光拝覧文章	寛政六年	柳塘山人書
(江島詣)	寛政六年頃	花屋久次郎
(池上詣)	寛政六年頃	花屋久次郎
雑司谷詣	寛政七年	花屋久次郎 (高井蘭山)
府中六所詣	寛政七年	花屋久次郎
成田詣	寛政七〜十年	花屋久次郎 膝耕徳・高井蘭山
新編王子詣	寛政十年	花屋久次郎
(鹿島詣)	寛政十一年	山口屋藤兵衛 膝耕徳書
		花屋板と同一内容・文政頃の再板の可能性あり・花屋が寛政十一年に刊行したものか
新編筑波詣	寛政十二年	花屋久次郎 高井蘭山
鹿島詣文章	寛政十二年	花屋久次郎 膝耕徳書
(鹿島詣文章)	寛政十二年	岩戸屋喜三郎 膝耕徳書 前書と同一内容・文政六年か
亀井戸もうで	寛政十三年	前川六左衛門・若林重左衛門合梓 楠花堂作・跋
寛政新編江ノ島詣文章	寛政期	花屋久次郎 膝耕徳書 仙鶴堂の再板あり
身延詣	寛政〜享和	花屋久次郎 円亭九狐
鎌倉詣	寛政〜享和	花屋久次郎 高井蘭山校 勝間龍水編
江島鎌倉往来	享和元年	鶴屋喜右衛門 (仙鶴堂)
享和新編日光拝覧文章	享和元年	花屋久次郎 柳塘山人書

書名	刊行年	版元・作者
享和新編浅草詣文章	享和二年	花屋久治郎 山口屋藤兵衛（錦耕堂）の再板あり
菅原詣	享和二年	花屋久治郎 尾崎直中作 高井蘭山補
榛名詣	享和三年	花屋久治郎 清水玄叔著・高井蘭山閱・膝耕徳
改訂再板竜田詣（頭書隅田川往来）	文化六年	葛屋重三郎（耕書堂）
笔道幼学竜田詣倭文章	文化六年	花屋久次郎
東海道往来	文化六年	花屋久次郎
鎌倉詣	文化七年	花屋久次郎 高井蘭山校 蓮池堂作・書
隅田川往来	文化八年	西村屋与八
六阿弥陀詣	文化八年	（十返舎一九）
房州小湊誕生寺詣	文化九年	鶴屋金助（双鶴堂）高井蘭山
堀内詣	文化十年	花屋久次郎（高井蘭山）
筑波詣	文化十年	花屋久次郎 高井蘭山
飛鳥山往来	文化十一年	前川六左衛門
房州誕生寺詣	文化十四年	鶴屋金助 高井蘭山
新撰六阿弥陀詣	文化十四年	西村屋与八
第三期		
上州妙義詣	文政四年	山本平吉
成田詣文章	文政四年	山本平吉 膝耕徳
新鑄（撰）身延詣	文政四年	山本平吉 円亭九狐作
堀内詣	文政四年	山口屋藤兵衛 花屋文化十年板の再板
和歌浦名所文章	文政四年	鶴屋喜右衛門
（房州小湊誕生寺詣）	文政頃か	山口屋藤兵衛 高井蘭山 双鶴堂文化九年の再板か
（浅草詣文章）	文政頃か	山口屋藤兵衛 花屋板享和二年板の再板か
（鹿島詣）	文政頃か	山口屋藤兵衛 花屋板寛政十二年板の再板か
第四期		
巨黒詣文章	文政五年	西宮新六
（戸隠善光寺往来）	文政五年	西宮新六 十返舎一九
住吉往来	文政五年	西村屋与八
金毘羅詣	文政五年	西宮新六 十返舎一九
播州名所廻	文政五年	西宮新六 十返舎一九
大山廻富士詣	文政五年	西宮新六 十返舎一九 和漢三才図会を種本とする
箱根社道了宮七湯廻文章	文政五年	西宮新六 十返舎一九 東図本は信州木内郡中条村の物か
武州三峯山詣	文政五年頃	西宮新六
武州御嶽山詣	文政五年頃	西宮新六
武陽高尾山詣	文政五年頃	西宮新六
上州草津温泉往来	文政六年	西宮新六 十返舎一九
新撰富士詣	文政六年	西村屋與八 大山廻富士詣の後継作
鎌倉一覽文章	文政六年	鶴屋喜右衛門 高井蘭山校 勝間龍水編
鹿島詣文章	文政六年	岩戸屋喜三郎 膝耕徳書
日光詣結構往来	文政七年	岩戸屋喜三郎 東里山人
六阿弥陀詣	文政十一年	西村屋与八
下総名所往来	文政十一年	西村屋与八原板 文網堂求板
第五期		
筑波詣	天保三年	森屋治兵衛 高井蘭山 花屋寛政十二年板を原板
上州草津温泉往来	天保三年	森屋治兵衛 西宮新六文政六年板を原板
箱根社道了宮七湯廻文章	天保三年	森屋治兵衛
（鹿島詣）	天保頃か	森屋治兵衛 花屋寛政十二年板を原板か
（日光拝覧文章）	天保頃か	森屋治兵衛 柳塘山人書 花屋享和元年板を原板か
（戸隠善光寺往来）	天保頃か	森屋治兵衛 十返舎一九 西宮新六文政五年板を原板か
大師河原詣	弘化四年	藤岡屋慶次郎
日光詣結構往来	弘化四年	森屋治兵衛 東里山人
日光まうで	安政三年	松下堂芳山作
榛名詣	安政期	上州屋政次郎
隅田川往来	安政期	藤岡屋慶次郎 松蔭堂書

註1) 再版が確実なものは斜体としている。

註2) 石川松太郎『日本教科書往来』等を参考にしつつも、考察の上、妥当でないと考えられる年代推定は採っていない。推論にとどまるものには（ ）を施している。

花屋を中心としてオリジナルな往来物が次々と打ち出され、最も参詣型往来の刊行が盛んであった時期である。あとで論証するが、これらの参詣型往来は、その対象とされた名所・寺社にとって、初めて出た名所案内記類であるものが実に多い。こうした先駆者的活動によって評価しうるものである。

この時期の花屋の出版活動を支えていたのが高井蘭山（一七六二—一八三八）である。名伴寛、字思明で、江戸芝伊皿子臺町に在居する伊皿子御組屋敷の与力または、旗本の用人ともされるが、履歴については不明な点が多い。文政期には読本作家として成功するが、彼の初めての読本は享和三年（一八〇三）の『絵本三国妖婦伝』であるから、彼が花屋と組んだ時期は、三十歳過ぎで、未だ作家として成功する前であった。次に掲げる数字は、高井蘭山が関わったことが明確な参詣型往来の現存数を示したものである。このほか『江嶋詣』『筑波詣』など関与が考えられるものもあるが、そのことはここでは問題ではないので省略する。

- ① 上州妙義詣 寛政六年春／高井撰／十九点＋写本一点
 - ② 矢口詣 寛政六年十月／高井撰／六点
 - ③ 成田詣 寛政七～十年／高井跋／六点
 - ④ 菅原詣 享和二年／尾崎直中作・高井補／六点
 - ⑤ 榛名詣 享和三年夏／清水玄叔著・高井閱／十七点＋写本一点
 - ⑥ 鎌倉詣 文化七年／高井校／八点
 - ⑦ 堀内詣 文化十年秋／高井校／七点＋写本一点
- 一目瞭然だが、妙義詣・榛名詣が群を抜いている。すなわち寛政六年（一七九四）の『上州妙義詣』の成功により、後の読本作家としての地位を固める契機を作ったと言えよう。そのことより重要なことは、「撰」であったものが、「跋」・「閱」・「校」へと関与の在り方が変質していることである。これは、蘭山が次第に名声を手にしたことで、彼が目を通

したといういわばお墨付きを与えうる立場に上り詰めたことを示している。文学作品としては決して質が高いものではない参詣型往来の仕事は、当初駆け出しの作家にとって重要な生活の糧であった。

また第二期には、若干ながら未だに上方への劣等感が見受けられる。例えば、第一期の明和八年（一七七二）『隅田川往来』に「亦釣する海士の小舟、由良の湊もかくあらむ」という記述があるが、同じく第二期の往来物にも、随所に上方への意識が看取される。星運堂による『真間中山詣』（寛政二年）には「淀のわたりのここ地やせむ」とあり、『成田詣』（寛政七年か）には「淀の渡の心地して」・「須磨の浦邊も斯やらむ」との記述がある。「淀」・「須磨」は和歌の歌枕としては定番なものであり、また真間や成田の地域性からみて、極めて有名な松尾芭蕉の『鹿島詣』（貞享四年）の冒頭「らくの貞室、須磨のうらの月見にゆきて」という文章を意識したものとも考えられるが、第三期以降に新たに登場する参詣型往来には、同様な記述が見あたらないことから、江戸近郊名所に対する自我が芽生えつつも、上方への劣等感が拭いきれない寛政・享和期の江戸文化の特質を垣間見ることができる。

第三期 文政四年
文化十年頃までに花屋の参詣型往来が一段落すると、文政四年（一八二二）から、他書肆おもに山本平吉と山口屋藤兵衛による花屋板の再板が見られるようになった。ただ再板するのではなく、『○○詣』という一つの文章の前後に情報を足して、これを一括して『○○詣文章』という表題に改題するなどした。例えば、山本平吉は、『成田詣』の冒頭に「不動尊略伝記」と不動明王に縁の深い楠正成の壁書を加え、書名を『成田詣文章』と改題して文政四年（一八二二）に刊行している。

第四期 文政五年
花屋などが取り上げてこなかったさらなる新規名所への往来物が企画され出版された時期である。そのほとんどが西宮新六と十返舎一九によ

るものであり、わずか一年と少しの間で、参詣型往来を次々と発表した。その範囲は関東に止まらず、西国にも及んでいる。こうした動向は、伊勢参りにおいて、金毘羅などへ足を伸ばす「伊勢参宮モデルルート」⁽²⁴⁾が、一八〇〇年頃を境に次第に定着しはじめるという社会現象を反映したものであり、また作者十返舎一九の他作品との関連性もある。

この第四期の作者もまた、第二期の高井蘭山と同じく町人化した武家である。『日光詣結構往来』の作者東里山人は細川浪次郎と言ひ、もと麻布三軒家に住む幕府の与力で、この参詣型往来を記した時にはおよそ三十四才であったと考えられ、読本・洒落本・人情本など幅広く手がける作家であった。

十返舎一九もまた武家の出で、重田貞一と言ひ、駿府町奉行同心の子であり、彼も同役を継ぎ、大坂へ転勤後に職を辞して作家の道へ入った。この頃、二十年にも及ぶ『東海道中膝栗毛』正・続編が片が付き、もう一方の代表作『金草鞋』を十数編出していたところである。彼の場合、およそ一年で参詣型往来のほとんどを発表してしまつたが、そのようなことが可能であったのは、『和漢三才図会』や自身の『続膝栗毛』・『金草鞋』などを利用するなど種本があつたためといふことは広く知られている。⁽²⁵⁾ 実際、

金草鞋十三編草津道・善光寺参詣（文政三年）↓戸隠善光寺往来、上州草津温泉往来（文政六年）

箱根社道了宮七湯廻文章（文政五年）↓金草鞋廿三編箱根山七温泉江之島鎌倉廻（天保三年）

のように、『金草鞋』で取り上げた内容を転用しているものと、この時の参詣型往来を基盤として後に『金草鞋』に反映させているものがあり、『金草鞋』との関係は深い。関係が深いということは、同程度の読者層を想定しているということであろう。

このように第二期と第四期における新機軸の参詣型往来を連作してい

く背景には、いわゆる町人化した武士が深く関与している。しかし同じように見える第二期と第四期でも、社会的動向に配慮して検討すると、違つた構造が見える。第二期においては、中村幸彦氏が寛政期の特徴として、寛政初年（一七八九）から三年までの松平定信による出版統制によつて筆を折つた文人達が、当座の生活資金を得るために戯作の作者となり、結果として庶民を相手とした戯作の隆盛の基礎を築いたとされたように、⁽²⁶⁾ 無名の作家が活躍した。その創作も先行名所案内の薄さから、自由な発想のもと行えた。

ところが、第四期において新作の参詣型往来を依頼された作者達は、新たな作品を生みだそうとする意気込みよりも、すでに売れた名前を期待されていた。東里山人・十返舎一九に限らず、合巻で名を馳せた晋米斎玉粒も同様である。文政期ともなると、一九自身が世に出した旅の滑稽本のほか、在地出版も盛んとなりつつあり、先行する作品群への配慮が必要であつた。過去の作品との違いを明確に打ち出す努力が必要であつたため、作者がその発想力・知識を発揮する機会は限られていたと言へる。

第五期 天保三年

この時期は、森屋治兵衛・藤岡屋慶次郎らによる第二期のさらなる再板、第四期の再板が見られることである。しかし若干ながら新しい作品も生んではいる。

このように概観すると、丹氏は後継作を生まなかつたと指摘しているが、しかし、再板をしつつ、徐々に新たな場所を開拓して、対象範囲の広がりを見せている。このことは、その後場所場所で後に大きな影響力を持つ地誌や名所案内が登場してきても、読みやすく適度に情報を盛り込み、且つ携帯に便利なものとして一定程度受容があつたことを示唆している。この背景には、花屋が多数世に送り出した参詣型往来が、多くの新たな名所を対象としていたという彼の先見の明があつた。ただし、創

意工夫に溢れていたのは、第二期と第四期のみである。これは往来物としての定型があるため、新たな名所を打ちだすか、従来のものに絵図や縁起を付して情報量を強化していくことしか、その殻を破る手段がなかったからである。

②花屋の出版計画と寺社参詣の大衆化

I、【参詣型往来の転換期】

第二期すなわち参詣型往来の大きな転換点を生み出したのが、花屋久兵衛・星運堂の出版活動である。星運堂は、上野寛永寺近くの下谷五條天神前にあった書肆である。しかし彼も当初参詣型往来がこれほど流行るとは予想していなかったように考えられる。例えば、寛政六年（一七九四）『上州妙義詣』の本文上部では「漢音具音の辨」と「日本の言語口聲の弁」「名頭字の弁」「古今大部の書」「開闢以来年数」「干支異名」などが並べ立てられ、手習い本としての性格がきわめて強い。これに対して享和三年（一八〇三）『榛名詣』では、同箇所は、本文中では述べられない榛名山の詳細な情報に充てられている。『榛名詣』に限らず、次第に旅に便利な情報が書き込まれることが多くなることを考えても、『上州妙義詣』は間違いなく名所案内として意図されたものではない。

次にこの点を、上記二書の末尾広告の比較によって考察していくこととする。

『上州妙義詣』では、

東海道往来、たつ田詣、松嶋八景往来、真間中山詣、大師河原詣、矢口詣、池上詣、江ノ寫詣、上州妙義詣

といったものが載っている。さらに「近刻」として、

都名所往来、目黒詣、雑司ヶ谷詣、王子詣、府中六社詣、成田詣

の六書が予告されていた。

それから九年後の『榛名詣』では、

東海道往来、たつた詣、松嶋往来、雑司ヶ谷詣、真間中山詣、王子詣、府中六社詣、成田詣、大師河原矢口詣、江の島詣、上州妙義詣と先の『上州妙義詣』で予告されていたものも含めて、大方順調に刊行されている。ただし「近刻」としてあった『都名所往来』『目黒詣』は出版されなかった。その代わり、『上州妙義詣』で広告がなかったけれども、刊行されたものがあつた。それが次の八書である。

浅草詣、身延詣、鹿島詣、江戸菅原詣、上州榛名詣、日光詣、かまくら詣、新編筑波詣

これは、参詣型往来物の実用性が認識されるにつれ、榛名・身延・鹿島・日光・鎌倉など「関東の縁」に位置する諸参詣地への往来物も順次計画されていった結果であろう。つまり、手習いの本として、旧来の『竜田詣』『松島八景往来』『東海道往来』の継承作として『上州妙義詣』や『真間中山詣』などを刊行したつもりが、思いがけず別の用途として脚光を浴びたのではないだろうか。こうした需要の変質に対応するため、結果として星運堂も関東一円に対象地を広げていったのであろう。この点をもう少し論証してみたい。

まず寛政六年（一七九四）には刊行の予告をされながら、享和三年（一八〇三）までに撤回されたと考えられる『都名所往来』について検討を加えたい。花屋では、天明八年（一七八八）に『洛陽往来』を刊行するなど、以前より地理型往来を刊行していた。寛政六年（一七九四）段階では、定番中の定番である『都名所往来』の刊行をも計画していたところから、『上州妙義詣』の予想外の大成功により、旅への実用性が認められると、遠からず計画の見直しを迫られることとなった。その叩きを受けたのが『都名所往来』である。その結果その時点で既刊となっていた『竜田詣』『松島八景往来』『東海道往来』は出せたのであるが、

この『都名所往来』は断念しなければならなかったのである。そして代りに『浅草詣』や『身延詣』など寛政六年（一七九四）時点では刊行予定になかったものが、漸次刊行されていくことになった。

例えば上方では近江八景を題材とした往来物が板を重ねる一方で、武州金沢八景関連の作品が全く刊行されなかったのもこのことを強固に論証してくれる。金沢八景は、花屋の『鎌倉詣』の最後に加えられているだけで、最後まで金沢八景往来のようなものではなかった。何故なら、⁽²⁸⁾金沢八景は文人層の旅世界として成立していたからである。文人層の旅世界とは、彼ら文人層が自ら読みこなし歴史書、歌集の知識に加え、地誌や先人の紀行文の記述と、眼前の光景の多様なズレを楽しむ旅である。こうした旅世界では、往来物の入り込む余地がない。往来物を購入する階層とは合致しないわけである。名所案内としての機能を帯びてきた第二期においては、もはや近江八景と同じような意義は金沢八景には見いだせなかったということである。

もう一つ『目黒詣』も見ておこう。これも刊行が撤回されたものである。『上州妙義詣』の広告には、それぞれ別のものとして『大師河原詣』・『矢口詣』・『池上詣』、そして近刊としてこの『目黒詣』が宣伝されていた。ところが、享和三年（一八〇三）の時点では、『目黒詣』の刊行を取りやめただけでなく、『池上詣』・『大師河原詣』の名が消え、さらには『矢口詣』の上に大師河原を冠して『大師河原矢口詣』と改題して出版していた。『大師河原詣』・『池上詣』はその実態は不明で、とにかく一度は刊行されたことだけは確かであるが、再板された形跡はない。つまり何らかの理由で、『目黒詣』・『大師河原詣』・『池上詣』を全て集約させる形で『大師河原矢口詣』と改題して刊行したことが分かる。⁽²⁹⁾何故『矢口詣』が選ばれたかと言えば、『矢口詣』がそもそも大師河原、池上本門寺、目黒不動、品川、羽田弁財天などを含めた周遊コースとしての構成となっていたからであり、すべてを集約させるものとして極めて好都合であっ

たからである。⁽³⁰⁾

では、星蓮堂はどうしてこのようなことを行ったのであろうか。それは、品川御殿山・川崎大師・矢口・池上・目黒不動、これに羽田辨財天などを加えたコースが成立していたからである。筆者はすでに平間寺について、十八世紀半ばから江戸市中において、大師参りの風習が高まり、続いて御三卿の帰依があり、決定打として寛政八年（一七九六）の家斉参詣があったということを明らかにしている。⁽³¹⁾そのなかで次第に厄除信仰としても受容されていったのではないかと考えている。つまり、第二期は、真言宗の宗教行事によって江戸檀家と深く結びついてきた時代から、厄除信仰を軸に名所寺社として認識されていく時代へと突入していったまさに過渡期であった。実際、寛政期より以前のものを提示できないけれども、文化十二年（一八一五）三度目となる平間寺参詣を行った十方庵敬順が、目黒・本門寺・矢口明神・古河薬師を詣で、川崎宿に止宿したのち石観音・平間寺・羽田弁財天・品川海禅寺を巡礼して帰宅している。また嘉永三年（一八五〇）狐村（夕日庵）の『大師河原道の記』では、御殿山・羽田弁財天・平間寺を参詣して同じく川崎宿に泊まり、翌日矢口明神・本門寺・目黒を巡るといっような逆のルートを利用している。滝泉寺ではちょうど二十八日の縁日であり、狐村が

けふハ折ふし縁日にて、芝・高輪および青山・白かねのほりより群集する人夥し、中にハ目黒より池上へ廻るもあり、品川の遊びくつれの来てたわふる、もあり⁽³²⁾

と述べているように、池上・目黒・品川一帯は、ひとつの行楽地として認識されていた。またこれに矢口、大師河原、羽田などを加えた一泊の参詣も成立していた。『矢口詣』がもともと周遊コースとして構成されていたということは、寛政六年（一七九四）以前にすでにそのようなルート原型があったことの証拠である。その後平間寺の名声の高まりと共に、周遊ルートとして定着していき、『矢口詣』への集約が行われたの

である。

このように、寛政六年（一七九四）から享和三年（一八〇三）の九年間において、参詣型往来は、従来の地理的知識を習得させる手習い本から、参詣の便宜を図る目的で集約化したり、刊行計画を練り直すなどして、徐々に実際の旅への実用性という点で変質を遂げていった。そこには従来にはなかった江戸周辺の名所寺社への案内記としての受容の高まりが背景にあり、寛政六年（一七九四）から享和三年（一八〇三）までの間は、参詣型往来の旅への実用性という点での転換点であった。そしてそれは江戸の名所案内に富士・相模大山などが掲載されるような、江戸の延長として地域を認識する段階から、地域の個性を発見する段階への転換点でもあった。

II、「戦略的な出版計画」

寛政六年（一七九四）以降、参詣型往来の概念が転換すると、戦略的によく練られた形で刊行されていくが、そこには地域性が表れていた。

例えば相模大山・箱根では、文政五年（一八二二）の十返舎一九作のものが唯一である。富士も西村屋与八板のみである。つまり花屋久次郎でさえこうした場所の往来を出さなかった。一方では、妙義・榛名・身延・成田などを刊行しているにも拘わらずである。

何故なら新たな場所の往来物を刊行する場合、すでにその地域において有力な名所案内記の類があるか否かが大きな意味を持っていたからである。東海道筋の場合、花屋の出版が軌道に乗り始めた寛政九年（一七九七）に『東海道名所図会』が刊行された。そのため、東海道筋の往来物がしばらく登場しえない土壌を作ったのである。先述の『矢口詣』への集約化もこの余波であるとも考えられる。結果として、『東海道名所図会』以前に刊行された『鎌倉詣』・『江嶋詣』を除いて、東海道筋の名所への参詣型往来物はず、第四期まで待たざるを得なかった。

しかも第四期となると、第二期には無かった他の名所案内記が増えつつあった。結果として富士・大山においては、一作品のみということとなったのである。例えば、その『大山廻富士詣』は、甲州道中・吉田口から富士登拝する『新撰富士詣』とは違い、往復東海道を利用して須走口から富士山へ登山するルートをとっており、本来大山参詣を主題として作るうとした意図が見え隠れする。実際、巻末広告では『大山并富士山詣』となっており、大山と富士を並立とする往来を作ろうとしていたものの、『大山廻富士詣』という形で富士参詣を主題に持つてくる形態を取らざるを得なかった。それは、花屋などが当該地域への参詣型往来を出さない間に、

① 寛政元年（一七八九）『相州大山順路之記』

② 寛政九年（一七九七）『東海道名所図会』

③ 文化十四年（一八一七）瀧亭鯉丈『栗毛後駿馬』初編（『大山道中膝栗毛』）

④ 文政四年（一八二二）『江嶋鎌倉大山参詣記』

といった大山への名所案内が林立し充実しはじめており、名所案内としての往来物の存在意義が見出せなかったからである。そのため富士参詣へ矛先を向けざるを得なかったと言える。これに対して、『新撰富士詣』は、正面きって富士の参詣型往来を作成しえた。この時点では富士参詣を本格的に取り上げた名所案内記はほとんど生まれおらず、その意味においても利用価値は高かったと言える。

③ 関東各参詣地の名所案内記類

さてここまで幾度か参詣型往来物がその地域にとって初めての名所案内機能をもったと述べてきたが、ここでその根拠を示したい。表二は、関東各地に点在する寺社及び温泉への名所案内記（参詣型往来も含む）、

名所案内として利用されうる地誌類（例えば常陸で多い地名考の類は割愛している）、紀行文などを刊行年順に並べたものである。

まず十八世紀までに名所案内記が複数出ているのは、関東では江戸を除けば、鎌倉・日光のみである。そして両所とも、案内絵図もまた十七世紀中葉より出されている。⁽³³⁾これは、江戸版元よりもむしろ在地出版の発達によるものである。いずれも江戸発展とともにいち早く名所化した地域であり、幕府にとっても特別な場所である。十七世紀に鎌倉内の複数の寺社が幕府より手厚い助成策を受けていたように、鶴岡八幡宮を中心とした鎌倉は、武家にとって聖地であった。この点は、数々の幕府関係者による紀行文の存在が裏付けている。⁽³⁴⁾

しかし、綱吉政権前期を過ぎると、幕府の寺社助成策も、寺社自身による自力救済を許可するという方針に転換していく。幕府との由緒を持たない寺社は勿論のこと、縁の深い寺社においても、その配下の塔頭、院坊、御師、社家などは自力で生活していく必要に迫られた。⁽³⁵⁾そのため、日光でさえ宿坊が窮乏にあえいでいたとされる。⁽³⁶⁾鎌倉絵図等の出版も、鶴岡八幡宮本体ではなく、雪の下などに集住する社家その主体であったのも、同様な理由による。

紀行文では、鎌倉のほかでは、伊香保と箱根へのものが十七世紀からある。伊香保温泉は、榛名山や草津も含めて、十七世紀より主に国学者による紀行文が多く残されている。こうした紀行文が後世に与える影響は、寺社参詣の大衆化という観点から言えば、決して大きくない。何故なら紀行文は、それを自ら書き得る階層の間でのみ読み継がれていったからである。伊香保において、国学者の紀行文が近世を通じて幾作品も書き残されたのは、そのような国学者の旅世界として成り立っていたからである。

このため、十八世紀後半において寺社参詣の大衆化に対応しうる出版物は、江戸・鎌倉・日光を除きほぼ皆無であったといつて良い。一般的

に関東各地の寺社が地域の信仰の中核から脱皮し、広い範囲から参詣者を獲得していくのは元禄後期から享保期である。⁽³⁷⁾そして各地域への参詣が動態化し、講が形成されていくのが宝暦期である。この頃から、伊勢参宮への道中日記が多く残りはじめ、伊勢参宮だけでなく西国巡礼を組ませたいわゆる「伊勢参り」が広汎化していった。そしてそれに伴い参詣地の複合化が起こるのが明和・安永期である。これを期に徐々に、各地へ単一的に営まれていた参詣形態が変容し、互いの参詣者が同質化し、それまでの道中記のような各街道を主とした出版物では飽き足らなくなつた。こうして三都外への名所案内記の類が登場する状況が整つてきたのである。その裏には、それぞれの地域・寺社・名所に対して初めて訪れる旅人、さほど知識を持たない旅人、決してそこを主目的な地としない旅人がそこかしこに頻出してきたことがある。

こうした時期に登場したのが名所図会と参詣型往来物であった。名所図会は、安永九年（一七七〇）の『都名所図会』を端緒とし、寛政九年（一七九七）の『東海道名所図会』・『伊勢参宮名所図会』に続いて、文化二年（一八〇五）の『木曾路名所図会』が刊行されている。この名所図会と、往来物との関連性について述べると、『東海道名所図会』は星運堂の出版活動と期を一にしている。これに対して、『木曾路名所図会』の場合、参詣型往来に比べ大分遅れている。このことが参詣型往来の出版計画に影響を与えていたと考えられる。

寛政九年（一七九七）の時点において、十七世紀から名所案内絵図・名所案内記が出ている鎌倉を除いては、東海道筋の名所にとって『東海道名所図会』は決定打と言えるものであった。例えば、武州金澤において、『東海道名所図会』にある能見堂から見下ろす構図は、それまでの金澤絵図の概念を打ち破るもので、後に江戸の多くの書物問屋・地本問屋が歌川広重らに能見堂から八景を見下ろす風景を描かせる契機となつてい⁽³⁸⁾る。こうした理由から、寛政九年（一七九七）以前に出していた『鎌倉詣

表二 関東名所寺社の名所案内記類(参詣型往來を含む)

	区分	関東以外	富士山・大山	日光	箱根・伊豆・身延	榛名・妙義・草津	成田山・房総	筑波・東国三社	鎌倉	江ノ島	金沢	三峰・高尾・御嶽	江戸近郊
慶長19年(1614)											名所和歌物語		
元和2年(1616)									△丙辰紀行(林道春)	△丙辰紀行	△丙辰紀行		
寛永10年(1633)									△鎌倉順礼記(沢庵)	△鎌倉順礼記	△鎌倉順礼記		
承応2年(1653)				下野国日光山之図									
明暦元年(1655)		きそ通名所尽											
万治元年(1658)		東海道名所記(浅井了意)											
万治2年									鎌倉物語(中川喜雲)				
万治・寛文									○鎌倉絵図の発行		○金沢絵図の発行		
寛文2年(1662)													江戸名所記(浅井了意)
天和3年(1283)													紫の一本
貞享元年(1684)		野晒紀行(松尾芭蕉)											
貞享2年									新編鎌倉志	新編鎌倉志	新編鎌倉志		
貞享4年								△鹿島詣(松尾芭蕉)					
元禄7年(1694)					△塔沢紀行(藤本由己)				△塔沢紀行				
元禄11年						△伊香保紀行(跡部良顕)							
元禄期				日光山之御絵図(植山弥平次)									
正徳2年(1712)		女文龍田詣											
正徳3年		木曾路之記(貝原益軒)											
正徳4年				△日光名勝記									
享保19年(1734)		竜田詣											
享保年間		近江八景並序											
延享3年(1746)		東海道巡覧記											
寛延4年(1751)		増補東海路巡覧記											
宝暦2年(1752)								△鹿島詣(松尾芭蕉)刊行	鎌倉物語(中川喜雲撰, 菱川師宣画, 須原屋板)				
明和5年(1768)													

	区分	関東以外	富士山・大山	日光	箱根・伊豆・身延	榛名・妙義・草津	成田山・房総	筑波・東国三社	鎌倉	江ノ島	金沢	三峰・高尾・御嶽	江戸近郊
文化7年	⇕	旅行用心集							鎌倉詣				
文化8年							六あみだ詣						
文化9年							成田道中黄金の駒(赤須賀米, 西村与八ほか4名)・房州小湊誕生寺詣						
文化10年	第二期	金草鞋(十返舎一九)(始)						筑波詣					堀内詣
文化11年								金草鞋五編(鹿島・香取・息栖三社)					遊歴雑記(始)
文化14年			栗毛後駿馬初編(瀧亭鯉丈・連玉堂)				△相馬日記(高田与清)						六阿弥陀詣
文政1年(1818)			栗毛後駿馬二編										大師河原にあそぶ記(村尾嘉陵)
文政2年					金草鞋十二編身延道中之記(十返舎一九・森屋治兵衛)	△上信日記(清水浜臣)							
文政3年						金草鞋十三編普光寺草津道中							
文政4年	第三期		江嶋鎌倉大山参詣記		身延詣		成田詣文章		鎌倉紀行(戸田幹著, 武村市兵衛板), △遊相記(渡辺華山)	△遊相記(渡辺華山)			
文政5年	第四期	近江八景文章・東海道中膝栗毛(終)	大山廻富士詣(十返舎一九)・栗毛後駿馬二編		箱根社・道の宮七湯廻文章, 伊豆温泉名所順覧文章		△鹿島日記(小山田与清, 旅は文政2)	△鹿島日記(小山田与清)				御嶽詣, 三峯詣, 高尾詣	目黒詣文章
文政6年	⇕		新撰富士詣(晋米齋玉粒, 西村屋與八), 富士日記(賀茂季鷹, 河内屋茂兵衛)			上州草津温泉往来		○鹿島名所図会(北条時郷)	鎌倉一覽文章(勝間竜水)・鎌倉詣		△金沢名所杖(金沢藩士伊藤景山)	△秩父順拝図会(秩父順拝記, 竹村立義, 文政3作)	
文政7年				日光詣結構往来				△鹿島参詣記(竹村立義)					
文政8年			金華山詣文章, 塩釜詣						△四州真景(渡辺華山)				
文政11年	第四期	湯殿山詣文章・近江八景詩歌	隔搔録				下総名所往来						
文政12年								○常陸旧地考(鬼澤大海)	鎌倉攬勝考(植田孟縉)				
天保3年(1832)	第五期		金草鞋廿三編箱根山七温泉江之島鎌倉廻(錦森堂)		金草鞋廿三編箱根山七温泉江之島鎌倉廻				箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋廿三編	金草鞋廿三編箱根山七温泉江之島鎌倉廻	金草鞋廿三編箱根山七温泉江之島鎌倉廻		
天保4年			金草鞋(終), 保永堂東海道五十三次(歌川広重)							江ノ島まうで浜のさざ波			
天保5年	⇕										△金沢紀遊(児島大梅)		江戸名所図会, 嘉陵紀行(終)
天保6年			△雨降山の日記(源真澄)						△四親草	△四親草	△四親草	三峯山詣	

天保7年	⇕												江戸名所図会		
天保8年				日光山志 (植田孟縉)				○△航湖紀勝 (藤森弘庵)							
天保10年			○相中留恩記略 (福原高峰)			○相中留恩記略				○相中留恩記略	○相中留恩記略				
天保12年															
弘化3年 (1846)															
弘化4年			富士山真景之図	日光詣結構往来										大師河原詣 (藤岡屋板)	
嘉永2年 (1849)			○善光寺道名所図会 (豊田利忠)												
嘉永3年														大師河原道の記	
嘉永4年						○甲斐叢記 前輯 (大森快庵・村田屋孝太郎)									
嘉永6年										○春雨楼詩鈔					
安政2年 (1855)								○利根川図志 (赤松宗旦)							
安政3年		第五期		○日光まうで				成田道中膝栗毛 (仮名垣魯文・新庄堂・成仏図)							
安政4年						身延参詣甲州道中膝栗毛 (仮名垣魯文)									
安政5年				大山道中張替図会					○成田参詣記 (成田名所図会)						
安政期											江ノ島・鎌倉道中記	江ノ島・鎌倉道中記	江ノ島・鎌倉道中記		
万延1年 (1860)				富士山道知留辺 (梅園松彦), 滑稽富士詣 (仮名垣魯文)							○常陸誌料郡郷考 (宮本茶村)				
元治1年 (1864)												江ノ島往来			
				相州大山参詣独案内の道の記											
				○相州大山之絵図 (佐藤坊)											
			鎌倉江ノ島大山新板往来雙六							鎌倉江ノ島大山新板往来雙六	鎌倉江ノ島大山新板往来雙六				

註1) 在地出版によるものは○、紀行文には△を施した。なお△の紀行文は刊行されているか、筆写されて流布され、ある程度後世に影響を与えていると考えられるものに限っている。
 註2) 関東以外については、主なものに限っている。江戸近郊については、『江戸名所記』などは便宜的に記載したが、参詣型往来の対象となる江戸近郊の寺社について詳細に述べ、且つ名所案内の役割を果たしうる物意外は載せていない。

『江島詣』『大師河原詣』を除けば、『東海道名所図会』が刊行されて以降、第四期の文政五・六年まで東海道筋では、新しい参詣型往来が出なかった。

一方、『木曾路名所図会』が出た文化二年(一八〇五)は、すでに『上州妙義詣』・『榛名詣』が刊行されたあとであった。しかも『木曾路名所図会』は、江戸到着後に東国三社と日光をも内容に含むという不可解な構成をとっている。だが、こうした地域においても、すでに『筑波詣』・『鹿島詣』・『成田詣』などが出た後であった。つまり関東のどの地域においても、参詣型往来に先を越されていたのである。そもそも右のような不合理な構成をした上に、東国から伊勢参りの帰路として一般的であった戸隠・善光寺のみならず、何故か榛名も含まれておらず、『木曾路名所図会』は謎だらけの名所図会である。また『木曾路名所図会』が意識していた正徳三年(一七一三)の貝原益軒の『木曾路之記』のほか中山道の道中記も名所案内の機能は内在しておらず、このような複合的な要因によって、『上州妙義詣』と『榛名詣』が広く受け入れられたと言える。

④ 往来物の伝播と地方出版の活性化

当初三都の書肆による出版が主であったが、文化期頃から次第に旅の対象とされて来た地域において、在地出版による参詣型往来が登場した。たとえば星運堂の『松島往来』が文化年間から地元仙台の版元によって刊行されるようになった。その仙台の伊勢屋半右衛門は、塩竈・金華山・平泉・恐山など東北地方の名所寺社を積極的に取り上げていて、興味深い素材である。⁽⁴⁰⁾

その一方で、個人版参詣型往来といふべきものが誕生してきた。主体は宝暦・天明期から地方に多く育った地方文人、在村文人であった。彼らは損得拔きの強い郷土意識・身分意識を基盤として作品を生みだして

いた。次に掲げるのはその事例である。

- 享和三年(一八〇三) 原澤菊次郎『三坂詣』
- 文化六年(一八〇六) 青木重右衛門『鎌倉名所往来』
- 天保十二年(一八四一) 沼尻墨僊『土浦名所往来』
- 天保十五年(一八四四) 戒珠菴慧光『新編三浦往来』
- 安政三年(一八五六) 松下堂芳山『日光もうで』
- 弘化二年(一八四五) 白庵『白雲山詣』

こうした人物が各地に登場し、参詣型往来物を作成していくという歴史的潮流が現れている。この時期の文人層は十七世紀までの知識人と比べると、日本の歴史や祖先、自然、生活環境に対して感傷的で、十分に内面化しているところに一定の断絶を見いだすことが可能である。⁽⁴¹⁾ このように十九世紀に考証主義・復古思想などが顕著になったことについて、郷土史の先駆けと評価されることもある。それは名所図会や地誌の編纂だけではなかったのである。ここまで旅への実用性という点に特化してきたが、この動向を見るとき、教育という視点も重要であることが分かる。例えば、『土浦名所往来』の作者沼尻墨僊は土浦町中城の寺子屋師匠であり、『新編三浦往来』の作者戒珠菴慧光は、本文のなかに三浦地方の子供のために作るとはつきりと記している。江戸板元ないしは、その再板を行う在地板元などは旅への実用性を追求していたものであったが、次第に地域で幼児教育のためにその地域の往来物を作成する人々が現れてきた。したがって、参詣型往来は地域を江戸からの旅の対象として開発していく契機となっただけでなく、地域内部における地理的知識の再生産という点でも機能していく契機をも作り出していた。

郷

『鹿島志』(文政六年) 鹿島社の神官で高田与清門下の国学者北条時
『金沢名所杖』(文政六年) 金沢藩米倉家の家臣伊藤景山

『常陸旧地考』(文政十二年) 高浜村出身で本居大平門人の国学者・歌人鬼澤大海

『香取志』(天保四年) 香取社の神官小林重規、平田篤胤序

『相中留恩記略』(天保十年) 鎌倉郡渡内村の名主福原高峰

『利根川図志』(安政二年) 下総国相馬郡布川村の医師赤松宗旦

『成田名所図会』(安政五年) 中路定得・定俊↓佐原の国学者清宮秀堅

これらについて、羽賀祥二氏は、福原高峰などを事例にして、十九世紀の復古的兆候は、十八世紀半ば以降に二世・三世代にわたって「家」や「地域」で蓄積した知識を礎にしているとされた⁽⁴³⁾。それが蓄積されはじめる宝暦・天明期とは、ちょうど寺社参詣の大衆化の時期であり、地方法文人・在村文人が広く誕生してくる時でもあった。他地域への旅が盛んとなり、また他所からの流入者が増えるにつれ、急速に郷土への関心が高まり、歴史考証への志向を生み出す土壌が形成されていくのである⁽⁴⁴⁾。また地域内部の人間だけでなく、例えば竹村立義、植田猛縉、豊田利忠といった外部の人間がその地域に思い入れを持って行った活動がその地域に果たした役割というのも見過ごせない。

ここで提起したいのが、十九世紀半ばに林立する地誌編纂の先鞭をつけるものとして参詣型往來の存在があったのではないかということである。在地での出版のほか個人版参詣型往來の登場もあり、そしてそれが地域の地理教育に役立ったであろうこと、そして何よりその地域にとって初めての地理関連本となったという事実などから、そう言えるのではないだろうか。例えば、『鹿島志』を書いた北条時鄰は、花屋板の『鹿島詣文章』が出て二年后に生まれている。そして師である小山田与清の『相馬日記』(文化十四年)と『鹿島日記』(文政五年)の刊行に携わった経験をもとにして約二十年後の名所図会に結実させた⁽⁴⁵⁾。この二つの鹿島案内記の誕生は果たして偶然の産物なのであるか。

江戸の参詣型往來は多くの名所にとって初めてとも言える名所案内であり、一方でそうした行為を真似る、又は触発される地域の文人層が出現した。こうして参詣型往來は、地域内部で地理的知識を蓄えさせる役割を果たし、さらにはより本格的な地誌を生み出す基盤となったのである。その段階にまで成熟すると、今度は地域発信の名所図会・地誌が必要とされる。

そして彼らの郷土意識・考証主義がどうあれ、これらの一部が販売され、名所案内ともなっていたのも事実である。ほとんどの地域で初めての詳細な地誌となったのであり、実用的なものとしても十分に活用されたことは『利根川図志』の事例でも明らかである⁽⁴⁶⁾。この点は、和歌山藩家老三浦家の儒者石橋生庵が鎌倉参詣に際して、江戸の貸本屋から『新編鎌倉志』を借りている事例⁽⁴⁷⁾、あるいは紀行文において先行の紀行文のみならず地誌の利用もみられる点、吉田藩藩儒山本恕軒が『東海道名所図会』を持ち歩いての旅を行っていたことなどからも十分傍証されるだろう。こうして地域側から文人層にも影響を与えうる書物が登場してくることになる。

こうした動向について、国学の影響を指摘する説⁽⁴⁸⁾、国民国家形成論を以て幕藩領主層の介在を指摘した説⁽⁴⁹⁾などがあるが、国学などが受容されている層は村ではほんの一握り⁽⁵⁰⁾である。ただし十九世紀に入ると縁起の世界、民俗の世界から解き放たれ、考証主義的な思想へと転換することは確かでもある。こうした潮流は、明和・安永期における寺社参詣の大衆化とそれに伴う参詣地の複合化の結果もたらされた(他所)の観察と(故郷)の発見、そして寛政・享和期の参詣型往來・名所図会の流布によって先鞭がつけられ、郷土への意識を強めた。国学への接近・受容の動きはあくまでもその一端としてあったという程度の理解が現在のところ妥当なのではないだろうか。全てを独善的で排他的な意味での国学、そして近代天皇制国家・国民国家へと収斂させるのはまだ早い⁽⁵²⁾ので

はないだろうか。

おわりに

参詣型往来は、江戸発信の江戸周辺への名所案内記類の先駆的存在であった。しかし往来物という基本的形態の限界があり、新規の名所を開拓していくことしか存続する道はなかった。道中図・名産品案内・宿一覧・里程・縁起・一望図などを挿入するなどして改良を加えていくも、やはり情報量には限界があった⁽⁵³⁾。ただし携帯の容易さ、簡潔な内容によって一定程度幕末まで受容を保っていたことも確かである。そして十九世紀には郷土の歴史・地理教育のテキストとしても利用されていた。そのことは、個人版の往来物が各地に生まれる一方で、江戸物の在地出版からの再版、そして在地出版からの独自の企画・刊行があり、さらには関東各地の村に購入され、写されて残っている事実からもそれが窺えよう。地方文人・在村文人による個人版参詣型往来・地誌編纂のような歴史考証の潮流は、寺社参詣の大衆化にいち早く対応した名所図会・参詣型往来の林立を受け、十八世紀から育った地域の文化的蓄積の上に立脚した、次なる歴史的阶段と評価できる。膝栗毛・金草鞋、東海道五十三次といったシリーズ物もまた、時期的にみて、江戸からの参詣型往来と、上方都市からの名所図会の成功を受けて用意された次の段階である。名所案内となりうる諸作品を、その受容層という点からおおまかに分類していくと、次のような提起ができるだろう。

紀行文・歴史書・詩歌集→江戸文人（上位）地方文人（上位）在村文人（最上位）

名所図会・地誌→江戸文人（下位）地方文人（下位）在村文人（上位）参詣型往来・金草鞋・膝栗毛→在村文人（下位）江戸中下層

やはり知識人層による寺社参詣は、本稿で指摘したような動向とは基

本的に乖離して存在していた。知識人は、儒学や国学の素養を持っており、三都のみならず城下町をはじめとする地方都市にも存在した。江戸文人や地方文人の頂点に立つ存在、そして村方では、近年「在村文人」と呼ばれる文化的行為をする者のうちごく限られた最上位層である。彼らは、過去の紀行文の影響を受けつつ（刊行されたものでなくても）、『新編鎌倉志』のような権威的な地誌は別格としても、旅に出る際には、目的に沿ったものがあれば、地誌や名所図会をも咀嚼して、歌集や歴史書などで得た知識を再確認し、旅の予習・復習をするものとして名所図会や地誌を役立てていた。その上で先人の紀行文で記された情景と眼前の光景のずれを楽しみ、あるいは歴史書の記述の真偽を実地踏査で確かめて学び、詩歌の世界に耽っていた。伊香保や箱根、鎌倉・江ノ島・金沢などでは早ければ中世から紀行文が残っているため、文人層によるこうした旅世界の形成には絶好の場所であった。彼らの旅の形態自体は、本稿で述べてきたような出版界の現象とは決して無縁ではないにせよ、ほとんどその影響を直接的に受けずに堅持されていたと言ってもよいだろう⁽⁵⁴⁾。

ただし彼らの一部が加わった参詣型往来の編述は、寛政・享和期という時期を考えても、文人層以外の多くの人々に、関東全体さらにはその周縁部にまで目を向けさせる意味においても、より評価されてしかるべきである。

註

- (1) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』、塙書房、一九八三年、一三七七～一三八〇頁。
- (2) 高尾一彦『近世の庶民文化』、岩波書店、一九六八年。
- (3) 水江漣子『江戸市中形成史の研究』、弘文堂、一九七九年。
- (4) 圭室文雄『日本仏教史近世』、吉川弘文館、一九八七年。
- (5) 川名登『河川水運の文化史―江戸文化と利根川文化圏―』、雄山閣、一九九三

- 年。同書は、利根川のほとりに住む下総国布川村の医師赤松宗且が編纂した地誌『利根川図志』（安政二年序）がどのような階層の人々へ販売されたかを実証されており、極めて興味深い事例である。また上杉和史「近世における浪速古図の作成と受容」（『史林』八五―二、二〇〇二年）、青柳周一「近世後期の絵図・地誌作成と『旅行文化』（『民衆史研究』六七、二〇〇四年）などは筆者自身の問題関心に近く、方法論において共感するところが多い。また直接旅文化とは関連がないが、益軒本の受容層について考察した横田冬彦「益軒本の読者」（横山俊夫編『貝原益軒』平凡社、一九九六年）、益軒本の土佐藩の国学者への受容という事例から、近世の「知」の構造を考察した小林准士「近世における知の配分構造」（『日本史研究』四三九、一九九九年）なども参考にすべきものである。
- (6) 岡村前掲書。
- (7) 石川松太郎前掲書、一二三頁。
- (8) 石川松太郎編『日本教科書大系』往来編別巻Ⅱ続往来物系譜、講談社、一九七七年。
- (9) 石川前掲書、一二六頁。
- (10) 丹前掲書、一〇一頁。
- (11) 『江戸歌舞伎文化論』、平凡社、二〇〇三年。
- (12) 従来は文化・文政期を研究対象とするものが多かったが、この時期の「文化の大衆化」についての概説的なものとして、竹内誠「庶民文化のなかの江戸」（同編『日本の近世第十四巻 文化の大衆化』、中央公論社、一九九三年）、比留間尚「さまざまな行動文化」（同書所載）がある。
- (13) 「文化の大衆化」『日本史講座第七巻 近世の解体』、東京大学出版会、二〇〇五年。
- (14) 中村幸彦『戯作論』（角川書店、一九六六年）（後に『中村幸彦著作集』第八巻、中央公論社、一九八二年に収録）、三五―七頁。
- (15) 中村前掲書、七六―七九頁。
- (16) 『近世寺社参詣の研究』、思文閣出版、二〇〇七年。
- (17) 南和男『幕末江戸の文化―浮世絵と風刺画―』、塙書房、一九九八年。西山松之助「嘉永文化試論」『日本常民文化紀要』第七輯、一九八一年。吉原健一郎「町名主の文化活動」『江戸の郷土誌』千代田区文化財調査報告書一四、二〇〇二年。
- (18) 新城前掲書。
- (19) 久留島浩「百姓と村の変質」『日本通史』近世五、岩波書店、一九九五年。
- (20) 塚本学『地方文人』、教育社、一九七七年。氏は、地方文人が登場するのはおよそ萩生徂来と同世代としており、正徳・享保期あたりと捉えている。
- (21) 杉仁「近世の地域と在村文化」、吉川弘文館、二〇〇一年。地方文人は地方の都市にいる者達であると従来の地方文人研究を批判して、村にいる在村文人層の研究を唱道した杉氏も在村文人が東日本で登場する時期を享保期頃と捉える。
- (22) 横山邦治「読本の研究」、風間書房、一九七四年。福田安典「高井蘭山伝考」『読本研究新集』第二集、読本研究の会、二〇〇〇年。澤登寛聡「解説」『農家重宝記』〈影印叢刊二〉、岩田書院、二〇〇一年。鈴木俊幸「江戸の読書熱―自学する読者と書籍流通」、平凡社、二〇〇七年。
- (23) 芭蕉自身の旅は貞享四年の八月だが、刊行は宝暦二年である。
- (24) 小野寺淳「道中記にみる伊勢参宮ルートの変遷―関東地方からの場合―」『筑波大学人文地理学研究』XIV、二〇〇一年。
- (25) 守屋毅「金比羅信仰と金比羅参詣をめぐる覚書―民間信仰と庶民の旅を考えるために―」（『愛媛大学教養部紀要』九、一九七六年）。小林寛子「筑紫紀行」と『続膝栗毛』『金草鞋』（『古典研究』二二、一九九四年）。丹前掲書、九七―一〇〇頁。丹氏は、一九が『讃岐国象頭山金毘羅詣』・『金毘羅参詣続膝栗毛』・『金草鞋』の内容が重ならないように書き分けていたことを論証している。
- (26) 中村前掲書。
- (27) 丹前掲書、一〇一頁。
- (28) 拙稿「金沢八景参詣と江戸資本・在地出版」『宗教をめぐる地域』（シリーズ近世の宗教と社会・第一巻）、吉川弘文館、二〇〇八年。
- (29) 東京学芸大学望月文庫蔵のものによれば、寛政六年十月に「矢口詣」として出されていることは確実で、「大師河原」は付されていない。なお後の藤岡屋板は全く別のもので、より紀行文文体となっており、何らかの紀行文をもとにしたものであるうかが、検討の余地がある。
- (30) 近年「池上詣」（小泉吉永氏所蔵）が見つかったが、これも本門寺へ往復する内容となっている。おそらくは、『大師河原詣』も同地へ往復する内容であったと推察される。
- (31) 拙稿「川崎大師平間寺の隆盛と厄除信仰」『民衆史研究』六四、二〇〇二年。安藤優一郎「徳川將軍家の演出力」（新潮社、二〇〇七年）は、將軍家・御三家・御三卿との関わりについて詳しいので、そちらに譲りたい。しかし、寺史を主に使われているので、史料の根拠には若干注意が必要である。また平間寺信仰は、まず江戸市での御影供などの真言宗の行事の高まりとともに江戸町人にも認識されていったのであり、突然將軍家の参詣によって有名になったわけではない。
- (32) 拙稿「川崎大師平間寺の隆盛と厄除信仰」『民衆史研究』六四、二〇〇二年、四七―四八頁。
- (33) 三都外への名所案内図については、西田與四郎「奈良の古地図」（『奈良叢記』、巖々堂書店、一九四二年）、白石克「江戸時代の鎌倉絵図―諸版略説」（『三浦古文化』三四、一九八三年）、矢守一彦「古地図と風景」（筑摩書房、一九八四年）、山田浩之「近世大和の参詣文化―案内記・絵図・案内人を例として」（『神道宗教

- 一四六、一九九二年)、山近博義「近世奈良の都市図と案内記類―その概要および観光との関わり」(奈良女子大学地理学研究报告) V、一九九五年)などを参照のこと。
- (34) 前掲拙著、第六章。
- (35) 圭室文雄前掲書。比留間尚「江戸の開帳(西山松之助編『江戸町人の研究』二、吉川弘文館、一九七三年)。鈴木良明「近世仏教と勸化―墓縁活動と地域社会の研究」(岩田書院、一九九六年)。
- (36) 秋本典夫「近世日光山史の研究」、名著出版、一九八二年。
- (37) 以下本段落は前掲拙著、終章。
- (38) 拙稿「金沢八景参詣と在地出版・江戸資本」高埜利彦・西田かほる・青柳周一編『シリーズ近世の宗教と社会』第一巻、吉川弘文館、二〇〇七年。
- (39) 山本英二「解説」『木曾路名所図会』(版本地誌大系六、臨川書店、一九九五年)。
- (40) 小井川百合子「仙台の町板について」『近世地方出版の研究』、東京堂出版、一九九二年。同「仙台の書肆について―西村治兵衛、西村治右衛門、伊勢屋半右衛門、伊勢屋安右衛門」『仙台市博物館年報』二、一九七九年。
- (41) 羽賀祥二「史蹟論―十九世紀日本の地域社会と歴史意識」、『名古屋大学出版会、一九九八年。
- (42) 塚本学「地域史研究の課題」『岩波講座 日本歴史』別巻二、岩波書店、一九七六年、三三五頁。西垣晴次「自治体史編纂の現状と問題点」『岩波講座 日本通史』別巻二、岩波書店、一九九四年。
- (43) 羽賀前掲書、第三章及び第九章。
- (44) 青木美智男「地域文化の生成」『岩波講座 日本通史』近世五、岩波書店、一九九五年。
- (45) 『鹿島志』解題
- (46) 川村優前掲論文参照。
- (47) 拙稿「寺社参詣における書物―鎌倉参詣と『新編鎌倉志』―」「旅と日本」『発見―移動と交通の文化形成力―』(国際日本文化研究センター国際研究集会報告書)、二〇〇九年。
- (48) 吉田藩の藩儒で当時今切関所の下改役であった山本恕軒が江ノ島・鎌倉・江戸・日光などを廻り新居に帰着した旅において、『東海道名所図会』を携帯していると思われる記述がある(渡辺和敏監修『近世豊橋の旅人たち―旅日記の世界―』、豊橋市二川宿本陣資料館、二〇〇二年)。彼のような地方文人の上位と言っても良い人物でも、名所図会は即時的な情報源という面で実用性を持ったものであったことが分かる。この場合新居からの出発であるから、名所図会を全冊携帯する必要がなかったという条件もあろう。
- (49) 表智之「歴史の読出し/歴史の受肉化」『江戸の思想』七、ペリかん社、一九九七年。
- (50) 白井哲哉「日本近世地誌編纂史研究」、思文閣出版、二〇〇四年、三三七頁。
- (51) 杉前掲書。
- (52) 例えば羽賀祥二前掲書、表論文。
- (53) 判や文字の変化などは特になく、利用され方は変化しても、形態は維持されていたことが分かる。その点では、手習い本としての範疇を大きく逸脱するものはなかった。
- (54) 前掲拙著で明らかにした通り、知識人層の多くは、庶民の旅とはおよそ異質で、極めて自律的な旅を行っていた。何故なら、思想的背景は各々だが、独自に読み込んだ歴史書や歌集・地誌の知識が旅の基盤となっているからである。
- (山形県立米沢女子短期大学、国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)
(二〇〇九年五月八日受付、二〇〇九年九月二五日審査終了)

Books and Pilgrimage to Temples and Shrines : Based on Analysis of Oraimono Textbooks on Travel

HARA Jun'ichiro

The study of Oraimono textbooks was started by pioneering achievements such as the "Classified catalog of Oraimono" edited by Kintaro Okamura, the "Outline of Japanese Textbooks - Oraimono" edited by Ken Ishikawa and Matsutaro Ishikawa, and the "Formation and Development of Oraimono" written by Matsutaro Ishikawa. These works mainly studied the formation process and genealogy of Oraimono textbooks. It was not until the publication of a series of academic works from the year 2000 that the social role of Oraimono textbooks drew the attention of researchers. However, the studies have never departed from the viewpoint of educational history or the fixed concept of "textbooks for educating common people." Therefore, the Oraimono textbooks of the "pilgrimage type" studied in this article have also been evaluated as merely a 'temporary fad that got on the traveling boom of "Dochu Hizakurige"'. In this sense, the study of the social role of Oraimono textbooks still has considerable potential.

Thus, this article focuses on Oraimono textbooks published in Edo and divides them into periods as follows: the first period (Meiwa to Kansei Periods), the second period (Kansei 6 to Bunka 10), the third period (Bunsei 4 and following), the fourth period (Bunsei 5 and following), and the fifth period (Tenpo 3 and following). The regular Oraimono textbooks published in Kyoto and Osaka were published in Edo in the first period, while the original books were published in the second and fourth periods. The books published in the previous periods were recycled in the third and fifth periods. In the second period, books were published with a relatively liberal concept, but in the fourth period, guidebooks and geographical books were already overflowing among the public, and differentiation from other books was necessary. There were also many easy publications that diverted other books such as that of Juppen Ikku. The popularity of authors rather than the contents was used to sell books.

During the Kansei Period when Oraimono textbooks of the pilgrimage type appeared, there were almost no books capable of responding to the "popularization of traveling" except in three major cities. Oraimono textbooks were used as practical works for traveling, while the value of Oraimono textbooks of the "pilgrimage type" was also enhanced by adding practical information such as benefits, Kaido (highway) maps, etc. to the body texts. Moreover, Oraimono textbooks of the "pilgrimage type" also played a "geographical" role in first-time visits to many regions, hence contributing to the local education of geography, and helping create a major historical trend of geographical books edited by local residents in later years.

Key words: textbook, guidebook, kansei period
